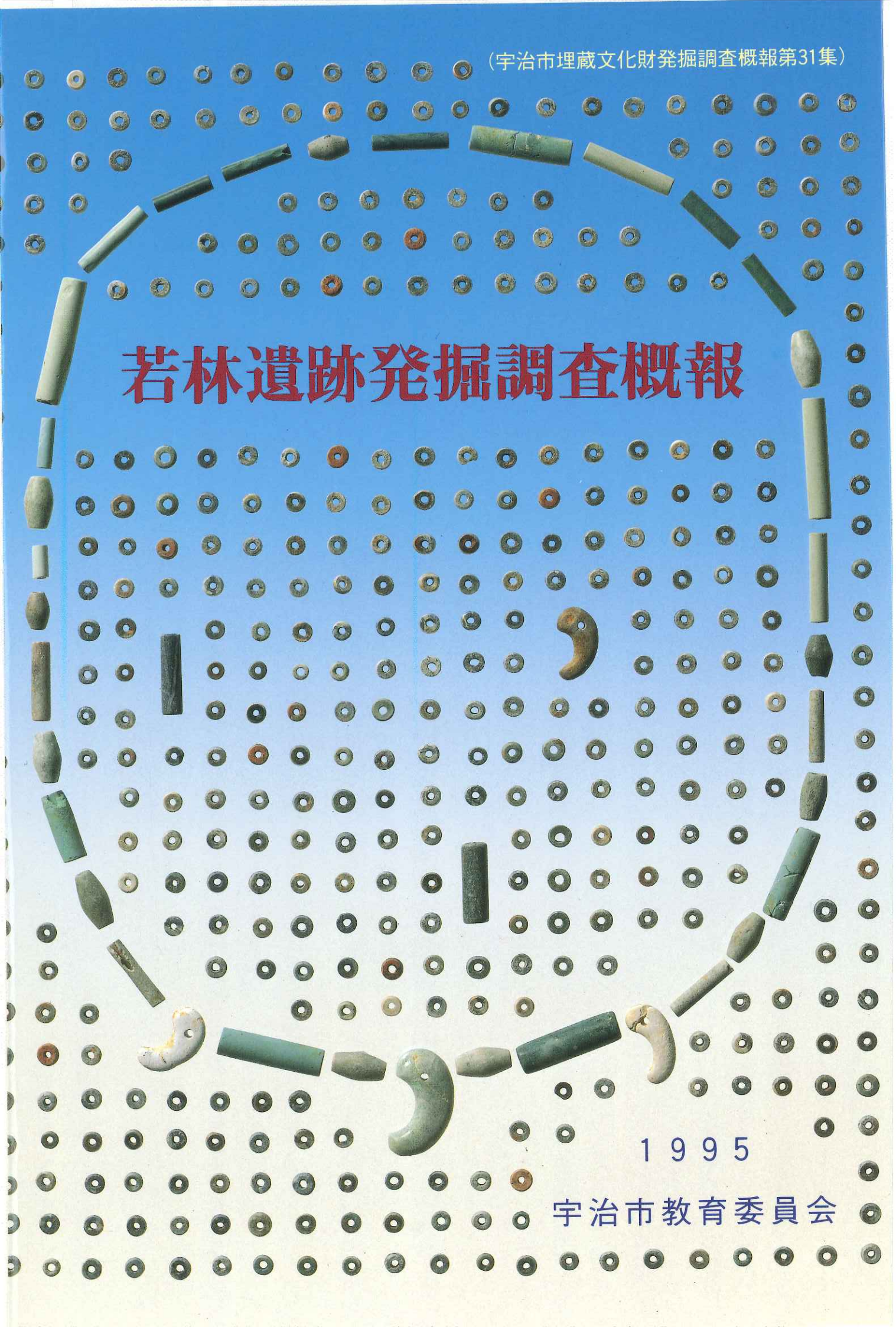
（宇治市埋蔵文化財発掘調査概報第31集）

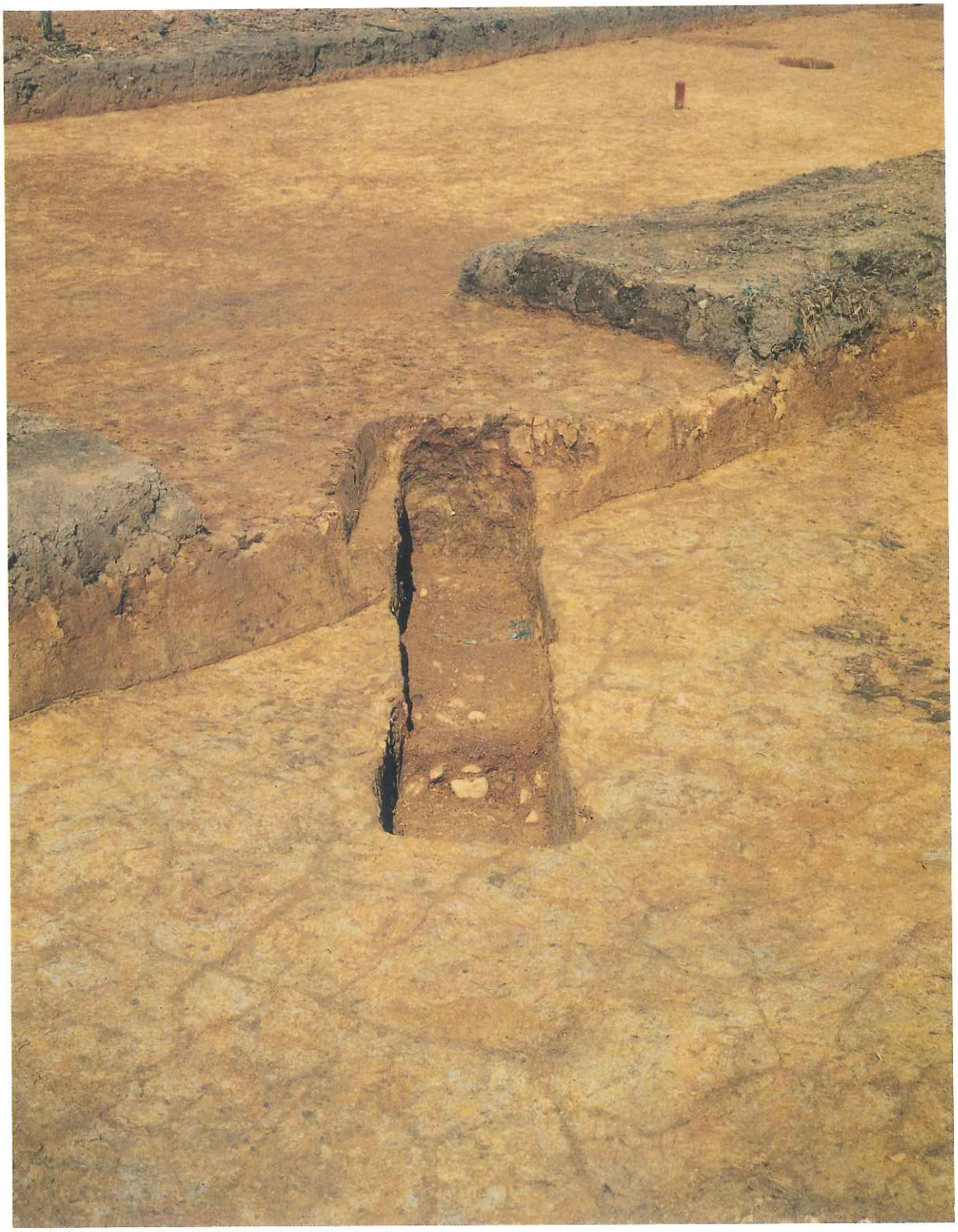
若林遺跡発掘調査概報



1995

宇治市教育委員会

巻頭写真①



土壙墓ＳＸ01（南西から）

勾玉・棗玉・管玉

滑石製玉類（勾玉・管玉・臼玉）

序

近年、宇治市では、宅地開発や道路建設があいつぎ、それに伴う埋蔵文化財の緊急発掘調査が増加しています。

本書は、宇治市教育委員会が開発事業に伴って発掘調査した若林遺跡の概要をまとめたものです。

今回の発掘調査では、弥生時代後期の方形周溝墓１基と古墳時代中期の墓１基を検出しました。なかでも土壙墓からは数百点にも及ぶ玉類が出土しました。このように多くの玉類が、盛り土をもたない古墳時代の墓からまとまって見つかったのは珍しいことです。

伊勢田町地区の発掘調査は、まだ始まったばかりですが、今回の発掘成果は、伊勢田町の歴史を解き明かしていく上で、また、古墳時代の社会を知る上で大変重要な成果であったといえます。

本書が多くの方々の目にとまり、広く宇治の歴史を知る機会となり、文化財保護に役立つことを願うものです。

最後になりましたが、調査に御協力いただいた開発事業者の方々を始め、また調査期間中に御指導・御助力を賜りました関係各位に対して心よりお礼を申し上げます。

平成７年３月

宇治市教育委員会

教育長　岩　本　昭　造

例　　言

1　本書は、平成６年度若林遺跡発掘調査事業の成果概要である。

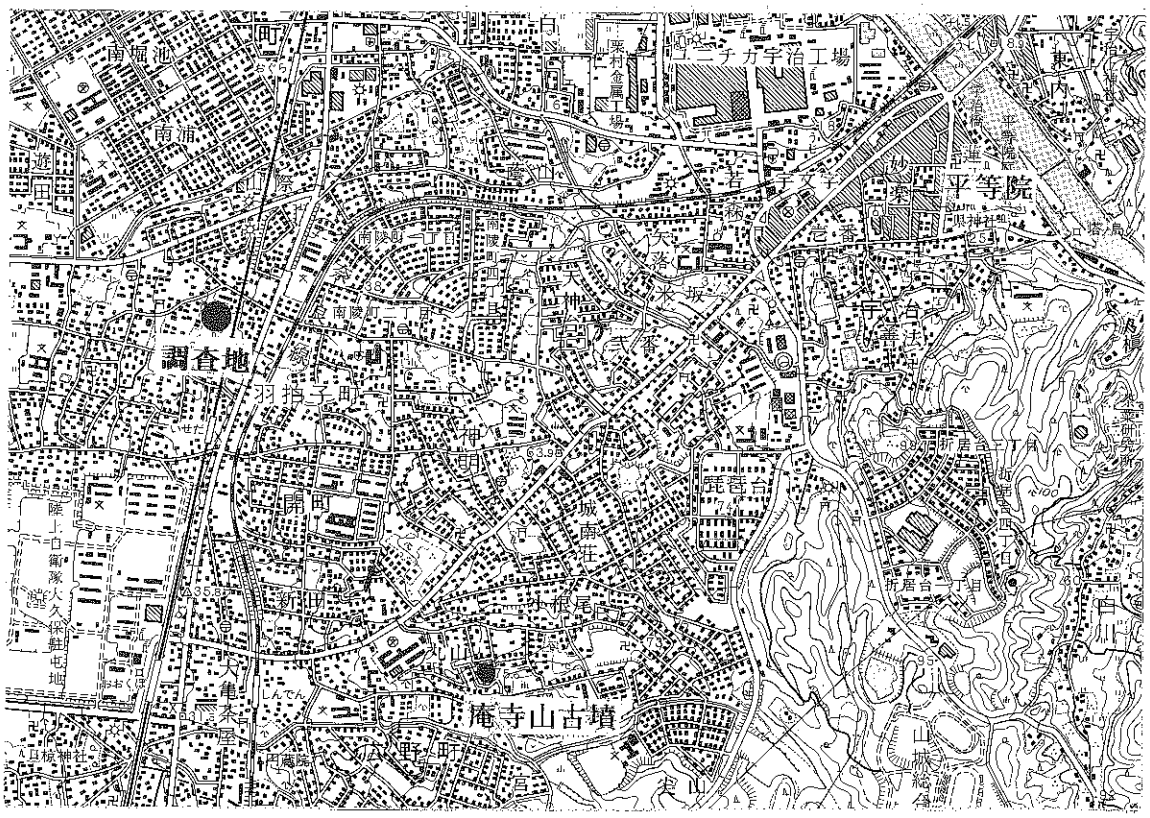
2　調査の地番は、京都府宇治市伊勢田町大谷38－１番地他である。

3　本書は宇治市教育委員会が刊行する『宇治市埋蔵文化財発掘調査概報』の第31集にあたる。

4　本書で使用する方位はすべて磁北である。

5　本書が収録する発掘関係資料は宇治市教育委員会が管理・保管している。

6　本書の編集は社会教育課が行い、編集及び執筆を浜中邦弘が担当した。



若林遺跡の位置

本 文 目 次

Ⅰ　はじめに …… 1

Ⅱ　位置と環境 …… 2

Ⅲ　過去の調査と調査の経過 …… 3
　A．過去の調査 …… 3
　B．調査の経過 …… 3
　C．発掘調査体制 …… 4

Ⅳ　検出遺構 …… 5
　A．土壙墓ＳＸ01 …… 5
　B．方形周溝墓ＳＸ02 …… 12

Ⅴ　出土遺物 …… 14
　A．土壙墓ＳＸ01 …… 14
　B．方形周溝墓ＳＸ02 …… 18

Ⅵ　まとめ
　A．ＳＸ01について …… 19
　B．ＳＸ01出土遺物について …… 20
　C．若林遺跡について …… 23

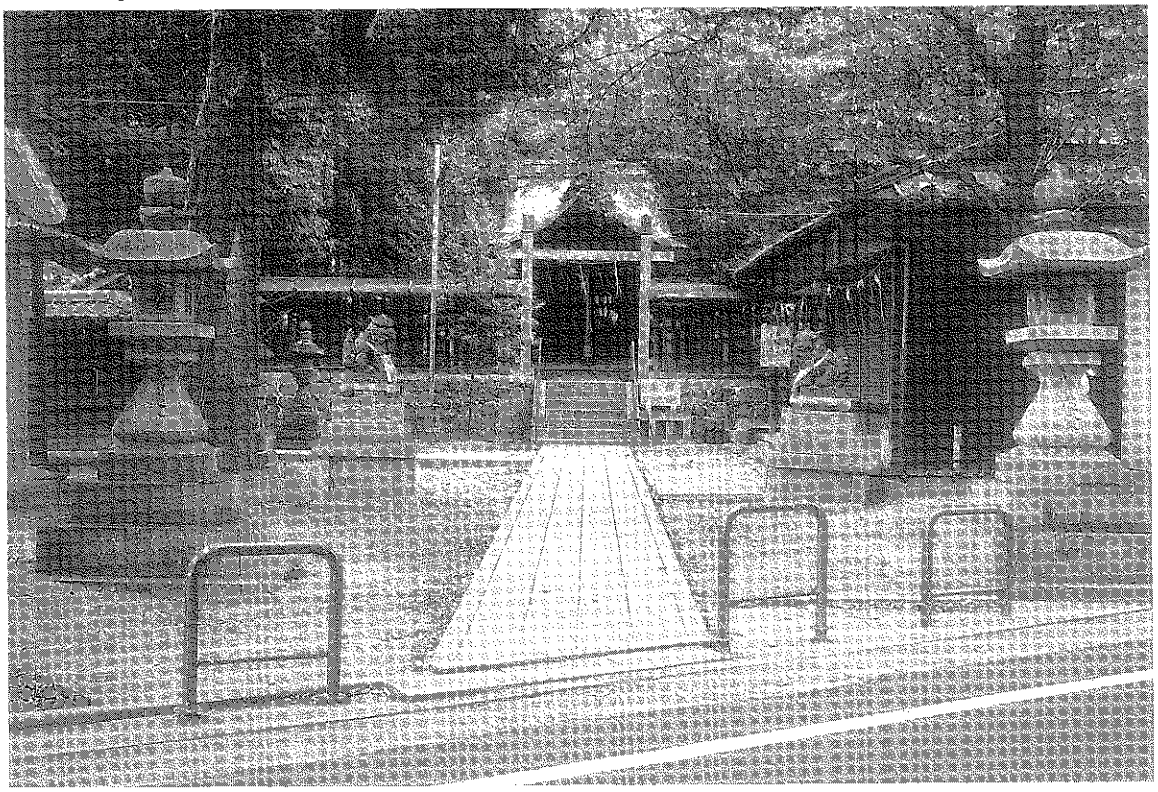
Ⅰ　はじめに

ここに報告をするのは、宇治市伊勢田町大谷38－1番地他において実施した若林遺跡発掘調査の成果概要である。

若林遺跡は、旧巨椋池の南、宇治丘陵の西北端部の伊勢田町若林地区一帯に展開する遺跡である。

若林遺跡は比較的古くから遺跡の存在が知られ、今回の発掘調査以前から伊勢田神社を中心として、土師器・須恵器片が採集されていた。伊勢田神社は『延喜式』に記載された式内社で古くは『山城国風土記』逸文に「伊勢田の社」としてみえる古社である。本殿は一間社流造りの檜皮葺建物で江戸初期のものである。現在は、豊秋津比売命・天照大神・多力雄命が祭られるが、『風土記』によると大歳御祖命の御子八柱木が当初は祭られていたらしい。若林遺跡はこれまで2回発掘が行われ、弥生時代後期から奈良時代までの遺構・遺物を確認している。

今回の調査は、共同住宅建設に伴う発掘調査であり、事業者よりの受託事業として本市教育委員会が実施した。調査期間は平成6年8月1日から9月6日までで、調査面積は約350㎡である。



第1図　伊勢田神社

Ⅱ　位置と環境

若林遺跡は、東から西に向かって緩傾斜する宇治丘陵の西北端部、丘陵と平野部の境（低位段丘）上に位置する。遺跡の西側には木津川により形成された沖積地が広がり、昭和７年まで存在した巨椋池が、北方約１㎞付近にまで広がっていた。

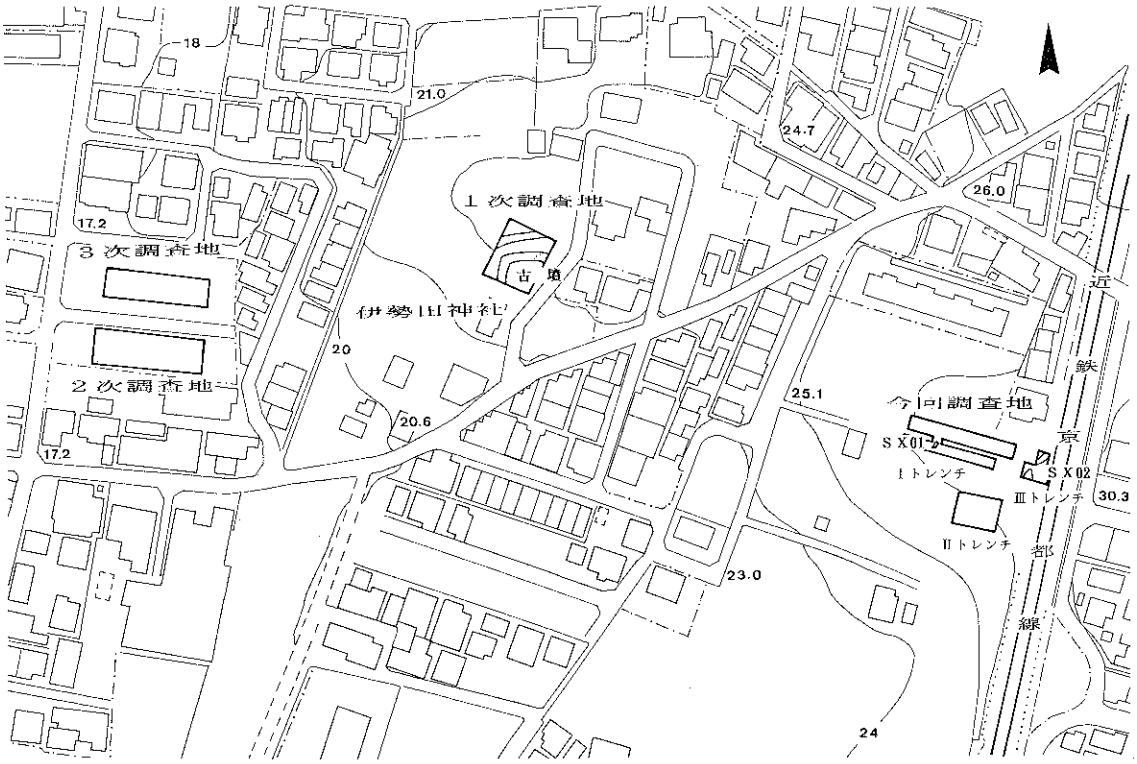
若林遺跡周辺には、弥生時代から中世にかけての遺跡が知られる。

弥生時代では宇治丘陵端部に神楽田遺跡[1]、巨椋神社東遺跡[2]等の遺跡が散在してみられ、弥生中後期の土器を始めとして、扁平片刃石斧や石鏃などの石製品が出土している。

古墳時代では、伊勢田塚古墳[3]、西山古墳、一里山古墳群がある。伊勢田塚古墳は棺底をもたない合口式の四柱式家形陶棺を直葬した全国的にも珍しい古墳である。西山古墳は「石のからと」と言い伝えられてきた古墳で、直径12ｍほどの墳丘規模を持つ。一里山古墳群は古墳の全容を知ることはできないが、前期に溯る埴輪や須恵器が出土している。

白鳳時代には広野廃寺[4]が造営される。発掘調査では西側築地跡を確認しているが、伽藍配置や寺域については不明である。創建瓦は川原寺式軒瓦で、平川廃寺に同范瓦が知られる。

中世には伊勢田町、大久保町、安田町に濠を巡らす、いわゆる環濠集落が形成される。



第２図　調査地周辺の地形図（１：5,000）

Ⅲ　過去の調査と調査の経過

A．過去の調査

若林遺跡では比較的古くより、伊勢田神社付近で土師器・須恵器片が採集されており、弥生時代から古墳時代の遺跡であることが想定されてきた。

（1）平成２年度の調査[5)]

宇治市教育委員会による伊勢田町若林14・15－１番地での調査。伊勢田神社の北東隣接地。調査の結果、弥生後期の溝や古墳時代後期の方墳（一辺14m）や土壙墓が検出され、これまで古墳空白地帯と呼ばれたこの丘陵部に、数多くの古墳が造営されたことが判明した。

（2）平成５年度の調査[6)]

京都府埋蔵文化財調査研究センターによる伊勢田町若林33番地での調査。伊勢田神社の西約10m地点。調査の結果、奈良時代の掘立柱建物跡や竪穴住居跡などを検出し、さらに円面硯が出土したことから付近に識字者層の住んでいたことが判明した。

３次調査[7)]は平成５年度調査地の南隣接地で，京都府埋蔵文化財調査研究センターによって今年度の７月半ばから発掘が開始され、弥生中期頃の廃棄土壙などを検出し、弥生中期の集落跡の一端が明らかになった。

B．調査の経過

調査地は、伊勢田神社の東側約30m、近鉄京都線の西沿いに位置する。当地は宇治丘陵の分岐する小丘陵端部上に位置し、標高は東側で29m，西側で27m程を測る。調査前の現状は畑、竹林であり、また当地周辺も畑、竹林が多いこと等から、比較的旧地形がそのまま残っていると考えられた。

調査は、開発に伴う竹林伐採と抜根後に、３ケ所のトレンチを設定し、作業を開始することとした。トレンチ名は、西側から順に１トレンチ（4.3 m×30m）、２トレンチ（９m×12m）、３トレンチ（7.5 m×３m）とした。重機掘削は調査地の関係上、３トレンチ・２トレンチ・１トレンチの順に実施した。

いずれのトレンチも、表土層と竹根の薄い漸移層（約30㎝）を除去すると、赤褐色の地山があらわれ、その面で遺構の確認を行った。

２トレンチは竹林以前は茶畑であったことが現状から看取された。さらに現状の地形と考えあわせると、２トレンチ部分においては茶畑の際に雛段造成を行って畑として利用されていることも理解された。したがってこれらの造成に伴う掘削により、遺構の遺存は可能性が薄いと判断できた。

3トレンチでは、重機掘削中にトレンチを東西に走る溝がみられたため拡張を行い、可能な範囲で溝の性格を追及した。この溝の埋土内には弥生土器が含まれており、溝が矩形に屈曲するため、この溝が方形周溝墓の周溝であると判断した。

1トレンチでは重機掘削段階から遺構がほとんどみられないことから、遺構精査を断続的に行ったが、調査終盤になってトレンチ中央やや西寄りの所で長方形の遺構を検出し、調査を実施したところ、土壙墓であることを確認した。墓壙底には玉類が副葬されていた。図面掘削完了の後は図面作成・写真撮影・遺物取り上げを行い記録を作成し、8月31日に報道へ発表を行い調査を終了した。

C．発掘調査の体制

今回の発掘調査に関係する期間・体制は下記のとおりである。

発掘調査体制

発掘主体者	宇治市教育委員会	
発掘責任者	宇治市教育委員会　教育長	岩本昭造
発掘担当者	同　社会教育課　文化財保護係　主事	杉本　宏
	同	荒川　史
	同	浜中邦弘
発掘事務局	宇治市教育委員会　参　事	池田正彦
	同　社会教育課長	堀井健一
	同　社会教育課　文化財保護係長	吉水利明
	同　社会教育課　主　任	加藤きみ江
調査参加者	時実奈歩・新井朋哉・宮崎一弥・畑陽子・久保千恵子 宮川千代実	

発掘調査の実施に伴う諸種の作業委託については下記に発注した。

土砂除去	株式会社　発掘建設リンク
遺物写真	寿福写房　寿福　滋

発掘調査に御協力いただいた方々

本発掘調査の実施期間中に下記の方々から専門的な御指導・御教示、ならびに御協力をいただいた。記して謝意を表したい。順不同・敬称略

伊達宗泰（花園大学）、辰己和弘（同志社大学）、辻川哲朗（加茂町教育委員会）、小泉裕司（城陽市教育委員会）、安藤信策・平良泰久・高橋美久二・水谷壽克・辻本和美・岸岡貴英・竹原一彦（財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター）、広瀬時習（同志社大学学生）、穂積裕昌（三重県埋蔵文化財センター）、財団法人宇治市文化財愛護協会

Ⅳ 検 出 遺 構

今回の発掘調査で検出した主な遺構は、１トレンチで検出した土壙墓１基と３トレンチで検出した方形周溝墓の周溝である。土壙墓については、攪乱・盗掘等の影響を受けていないため、非常に良好に検出することができ、土壙墓の構造・出土遺物の状況を詳細に観察することができた。方形周溝墓の規模・主体部等については、周溝が東に展開していくことから、近鉄京都線により東半部は切断されていると考えられる。他に土壙・溝が数箇所検出されたが無遺物であるため時期は判断しがたいが、ほとんどは畑開墾時のものであると考えられる。

以下、土壙墓と方形周溝墓について説明していくこととする。

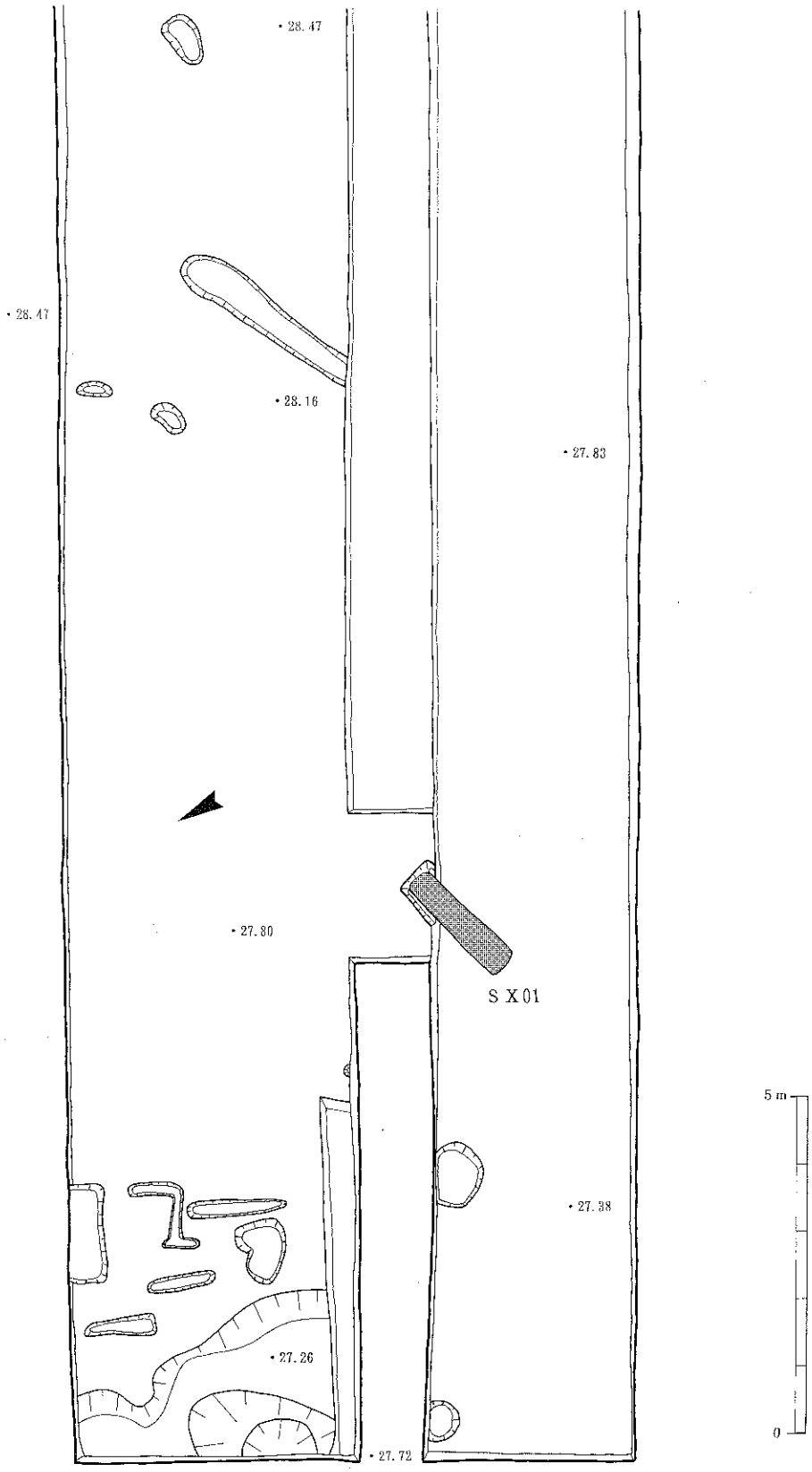
A．土壙墓ＳＸ01（第３～11図）

１トレンチ中央やや西寄りで検出した古墳時代の土壙墓である。

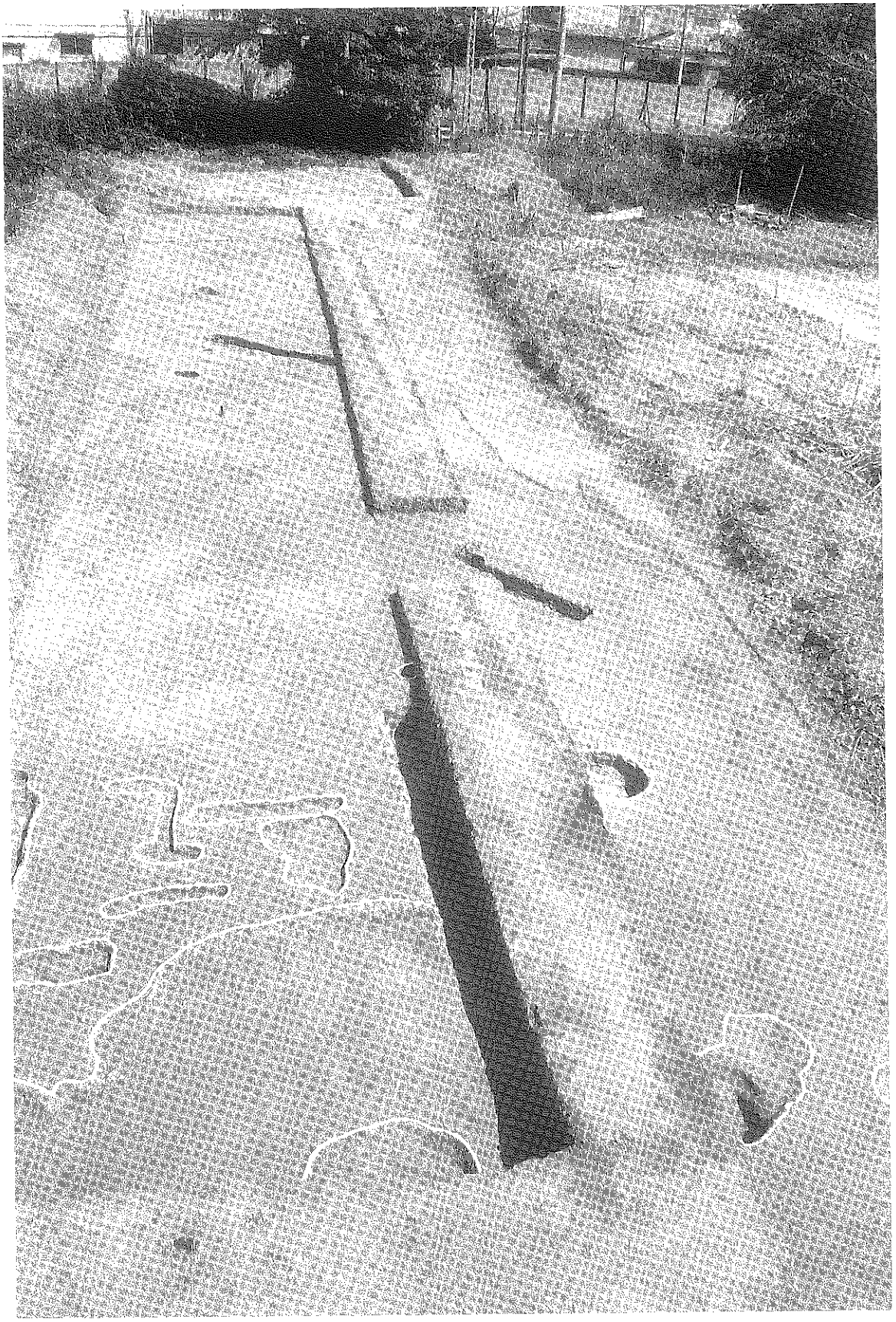
埋葬施設（第５～８図）

墓壙は、直接地山を掘り込んだもので、横断面形が二段構造を呈する、いわゆる二段墓壙である。墓壙堀方の上段は長辺（南北）約1.8 m，短辺（東西）約65cmの隅丸長方形であり、深さは現存で約15cmを測る。下段は長辺約1.8 m，短辺約40cm、深さは約45cmを測る。主軸を東西方向にとる小型の墓壙である。このように小型の土壙墓にもかかわらず、床面は砂敷で、床面の下部構造は約25cm～30cmの礫・粘土を交互に敷き詰め、被葬者頭部に位置する箇所を枕状に床面を一段高くさせる構造をとる。礫は、砂岩質の河原石が若干含まれるが、大半がチャート質の河原石である。床面の下部構造について構築順にのべていくと、まず、砂を薄く敷き、その上にやや偏平な礫を一面にほぼ隙間なく敷き詰める。そして次に粘土をその上に貼り、また礫を敷き詰める。粘土は礫を固定するために貼ったものと考えた方が理解しやすい。その後、被葬者頭部に位置する箇所をさらに礫をもう一段敷き詰め枕部を形成する。枕部の３段目の礫上面は凹凸が著しいために約５cm程の細かな礫を礫間に入れ込み、凹凸をなくそうとする工夫がみられる。最後に厚さ約３cm程の砂を全面に敷き詰め床面を構成する。枕部の西南側から玉類が出土したことから、被葬者頭部はこの枕部に乗せられていたことは確かである。

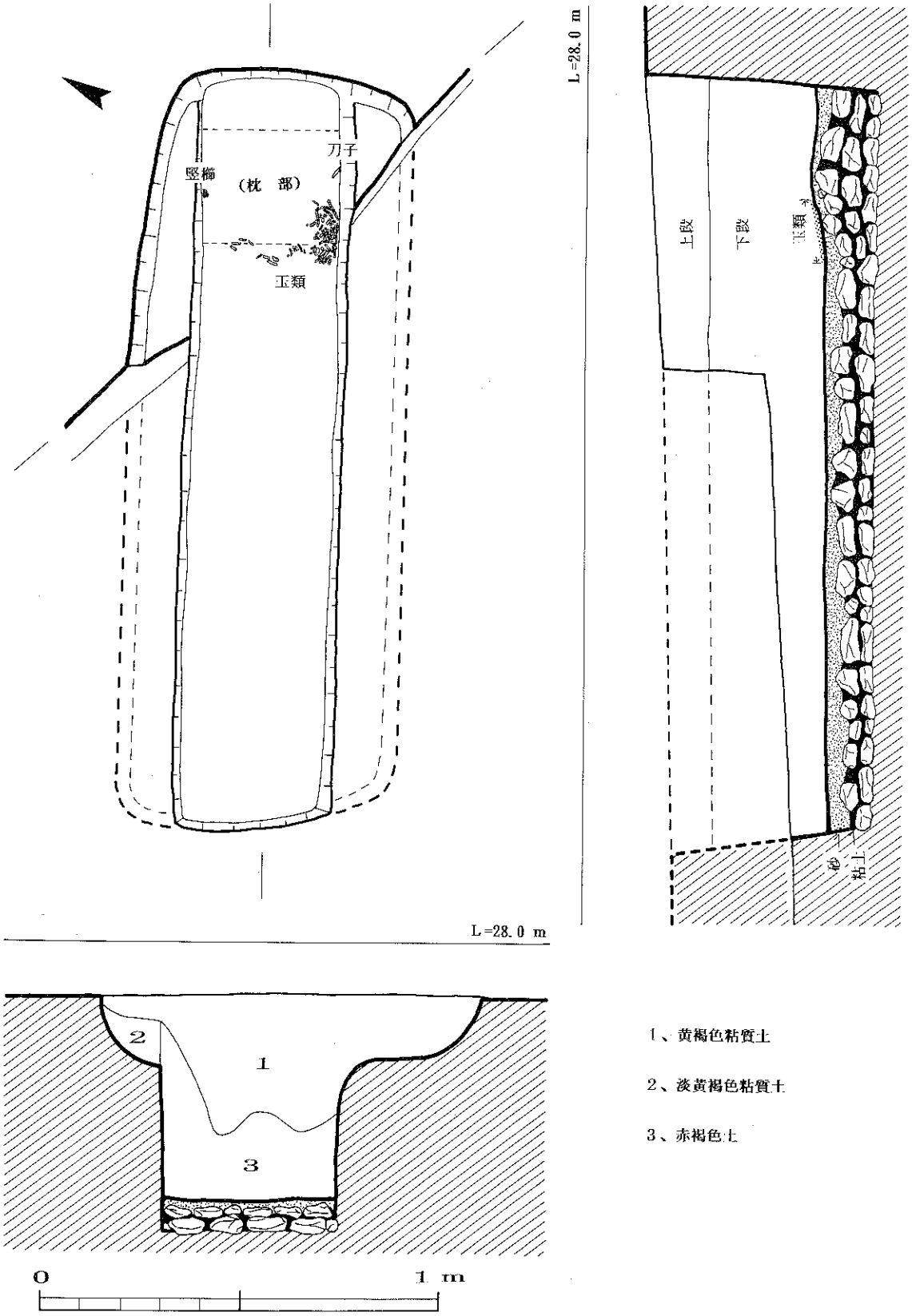
木棺の有無については、玉類が壁面に接していること、被葬者頭部を枕状に床面を隆起させていることから、木棺の存在は否定でき、土層に陥没状況が看取されたため、蓋板が二段墓壙の段部にかけられていたことが理解された。



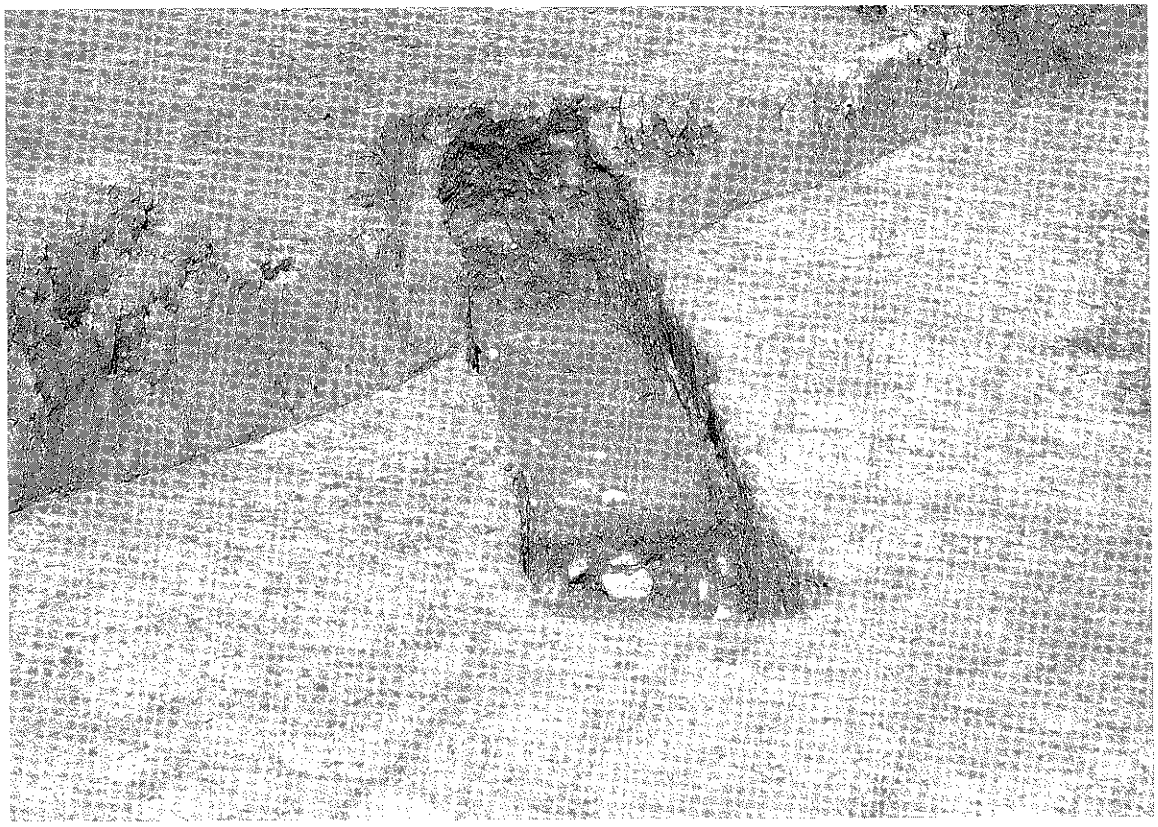
第3　1トレンチ遺構平面図



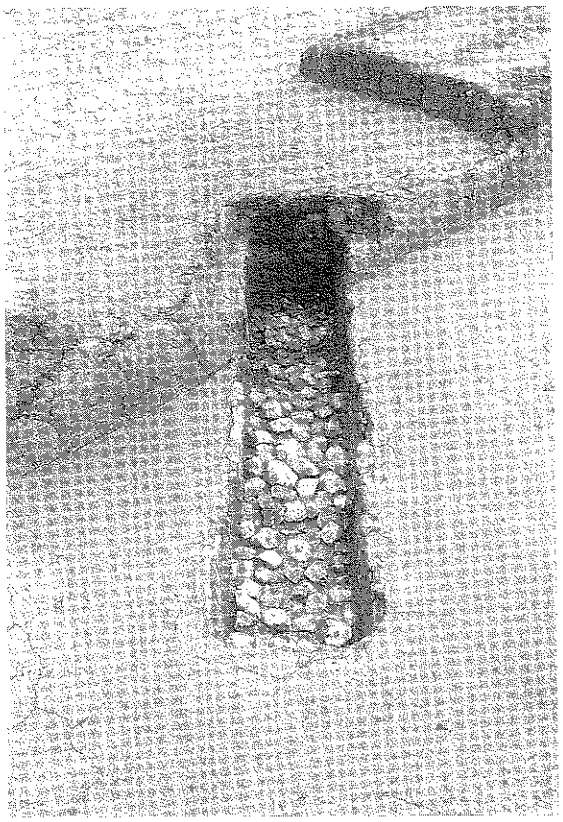
第4図　1トレンチ全景（西から）


L=28.0 m
刀子
竪櫛
（枕　部）
玉類
L=28.0 m
上段
下段
玉類
粘土
2
1
3
0
1 m
1、黄褐色粘質土
2、淡黄褐色粘質土
3、赤褐色土

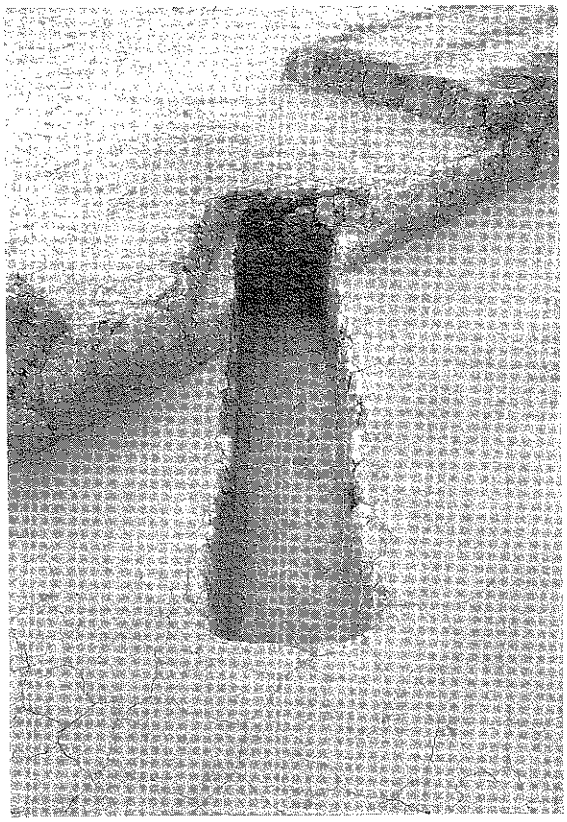
第５図　ＳＸ01実測図



第６図　ＳＸ01床面検出（南西から）



第７図　ＳＸ01床面下層



第８図　ＳＸ01完掘

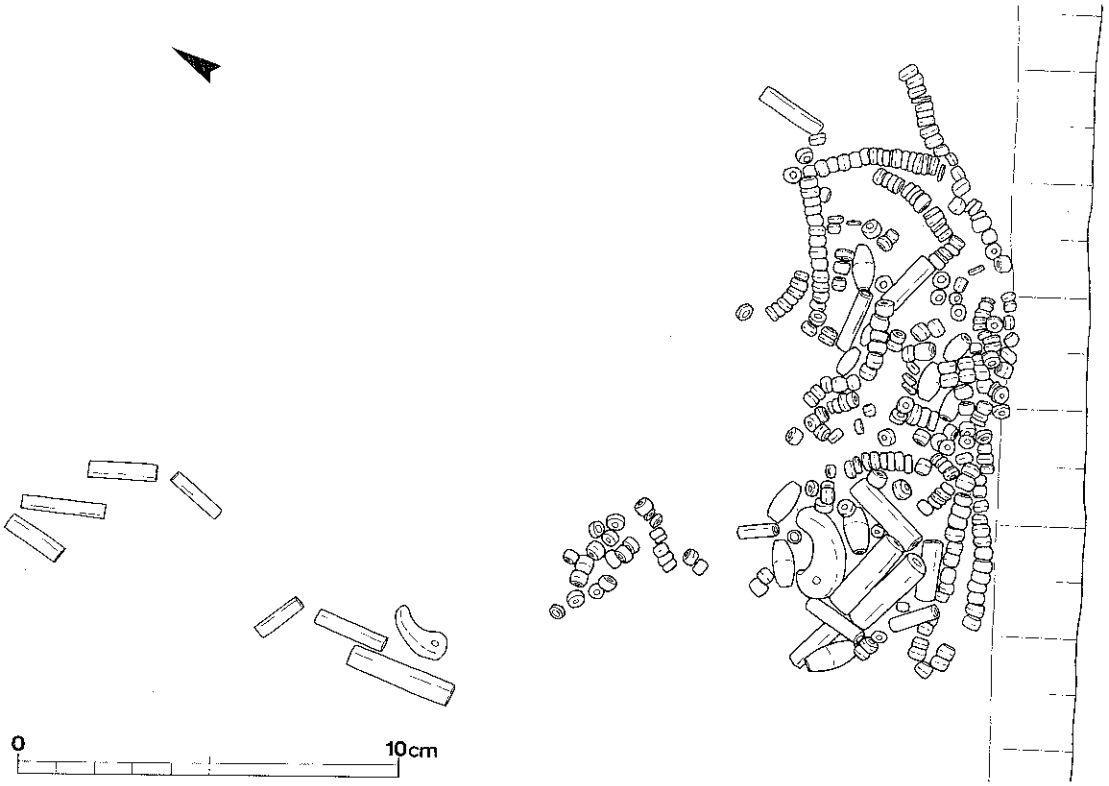
遺物の出土状況（第５・９～11図）

出土遺物は玉類、竪櫛、刀子、土器片で、すべて墓壙床面の被葬者頭部付近に集中してみられた。

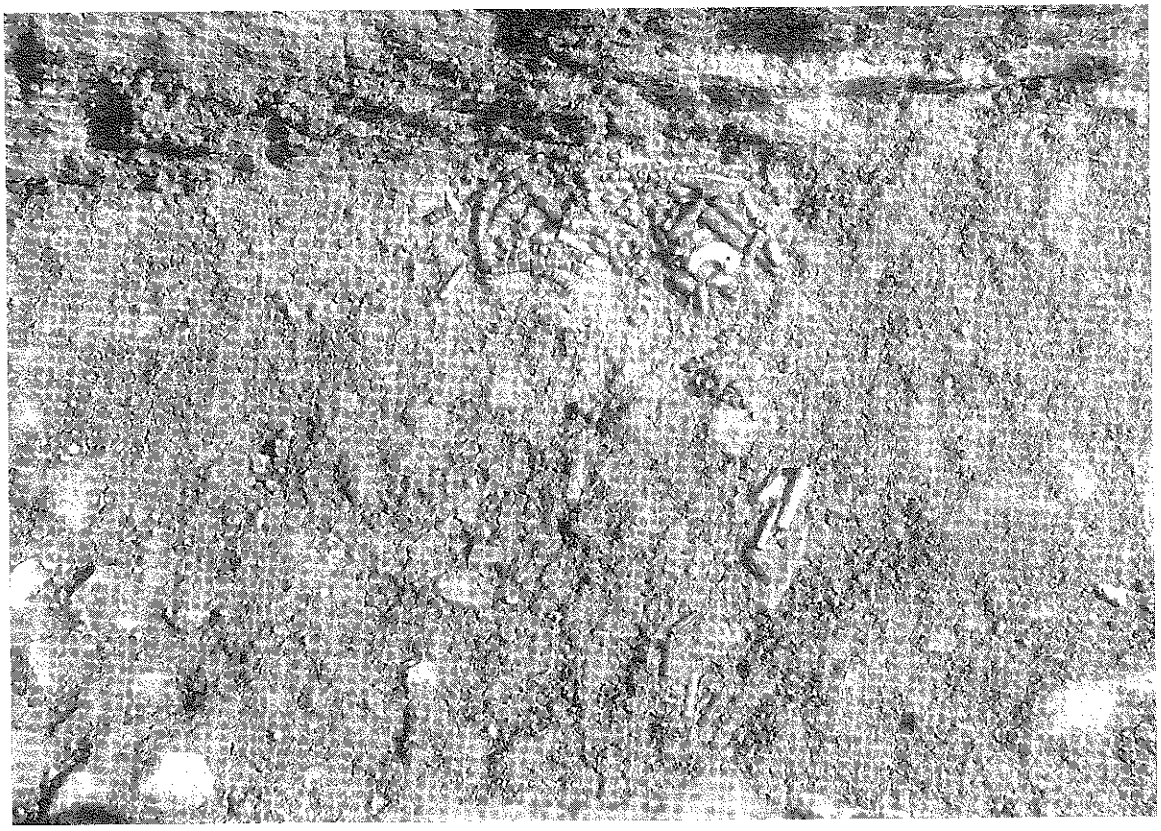
玉類は枕部のやや西の南端から北へ約５㎝の範囲に集中して出土し、玉の連なりを良く留めていた。玉類の種類は勾玉・管玉・棗玉・臼玉が認められる。出土状況から玉類は２連（Ａ・Ｂ）に大別でき、いずれも本来は紐に通されていたと理解される。Ｂは滑石製玉類を一連としたもので、勾玉を中心として多量の臼玉を数珠状に、２つの管玉を途中に入れ込み連結していたらしい。連ねた長さは114 ㎝となり長い。出土状況からＢの人体着装は考えられず、被葬者頭部の横に置かれていたものと考えられる。Ａは硬玉勾玉を中心としてガラス質勾玉２点・管玉22点・棗玉11点より構成されるもので、出土状況より人体着装の玉であったことが理解される。玉の連なり方については出土状況から棗玉→管玉→棗玉の順序が確認できた。硬玉勾玉周囲に太目の管玉が出土したことが確認できた。この出土状況から、Ａの本来の玉の連なりを復元すると、巻頭写真３のようになる。Ａの長さは55㎝となり被葬者の胸に垂れるには十分の長さである。

竪櫛は被葬者頭部位置からの出土であり、髪に着装されていたものである可能性は高い。

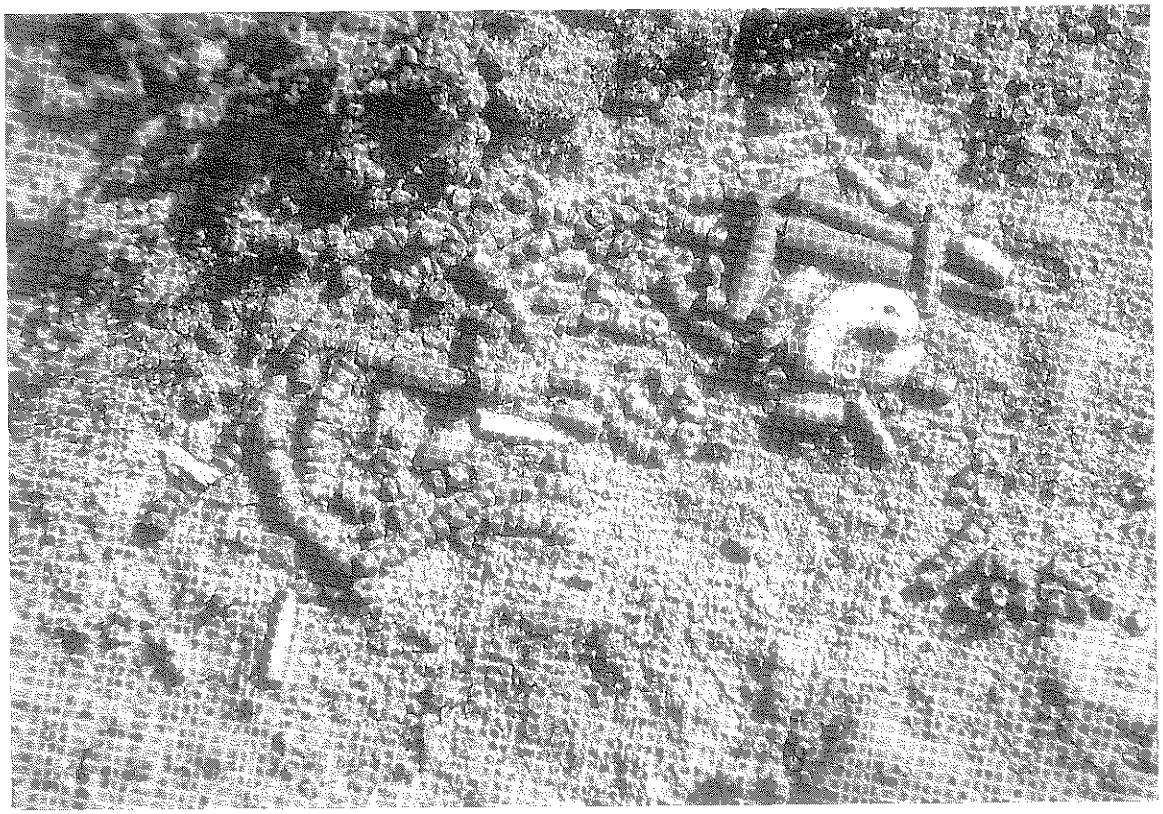
刀子は被葬者頭部のやや東の南壁面に接して刃先を西（被葬者側）に向けて置かれていた。



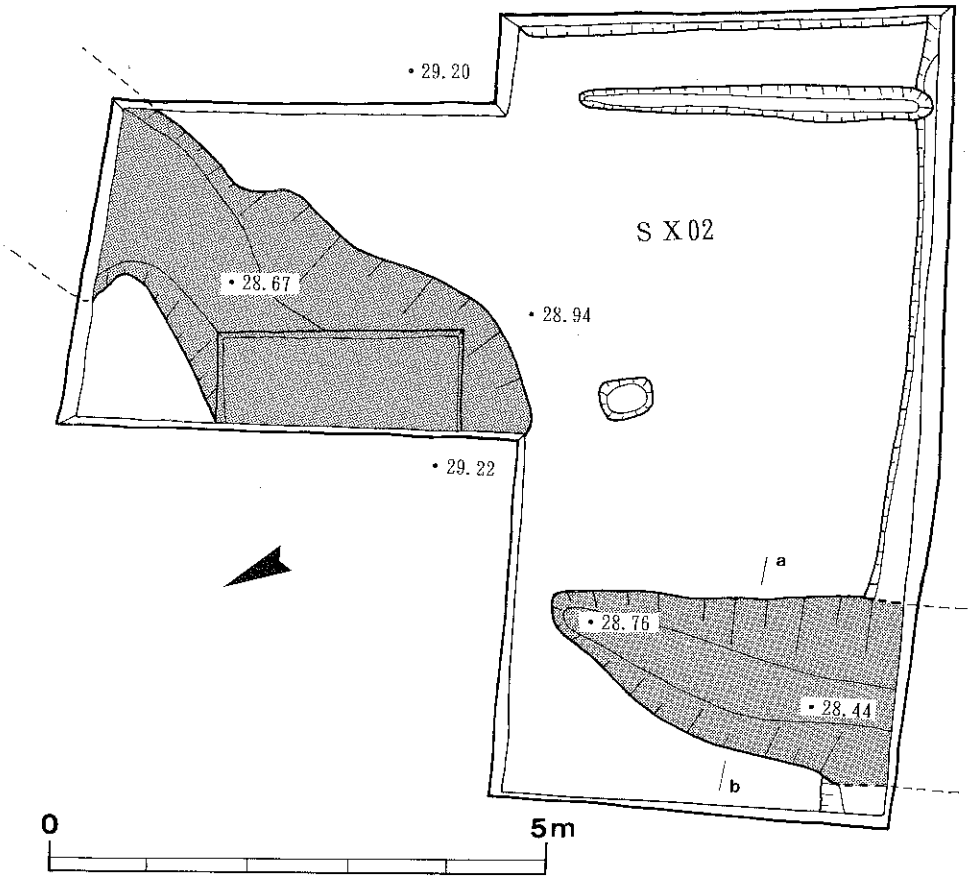
第９図　玉類出土状況実測図



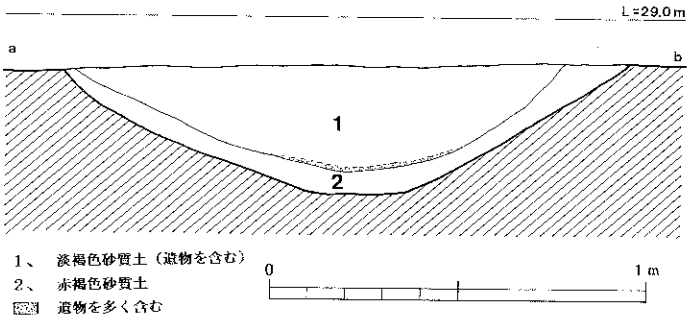
第10図　玉類出土状況（北から）



第11図　玉類出土状況（北から）



第12図　ＳＸ02実測図



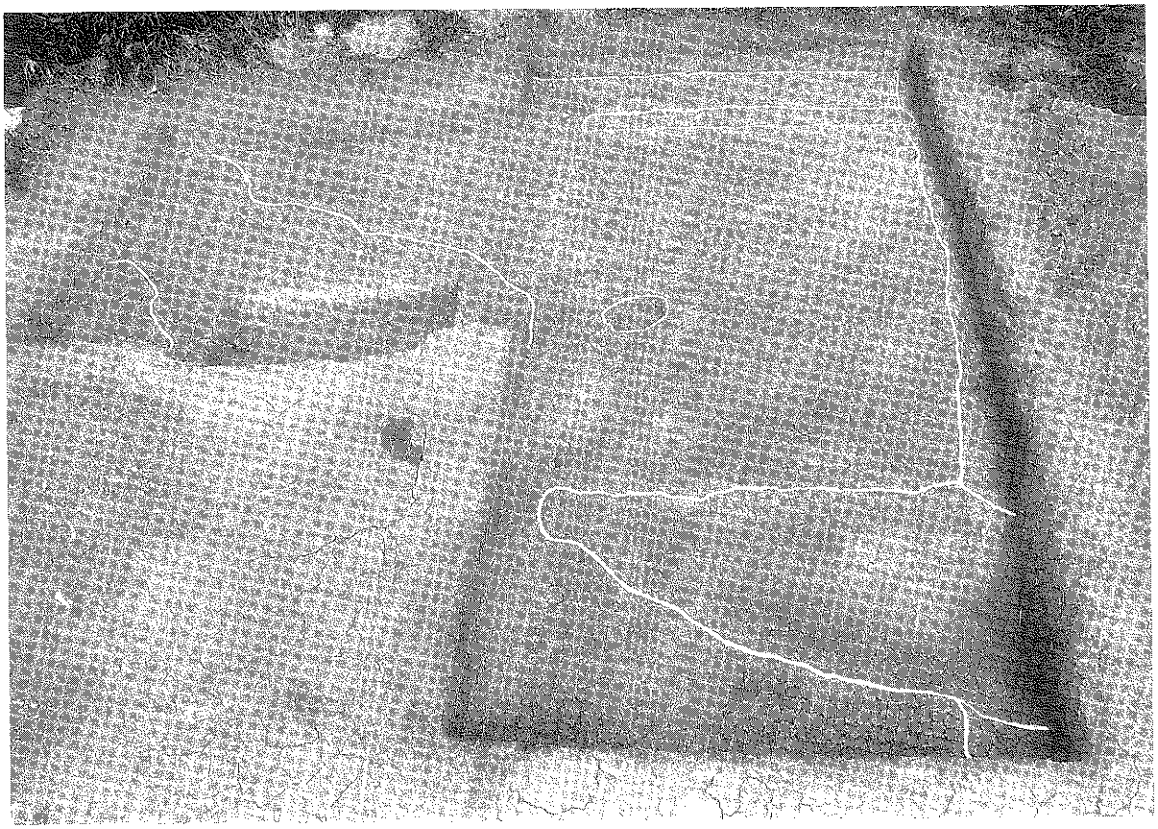
第13図　周濠埋土状況図

B．方形周溝墓ＳＸ02

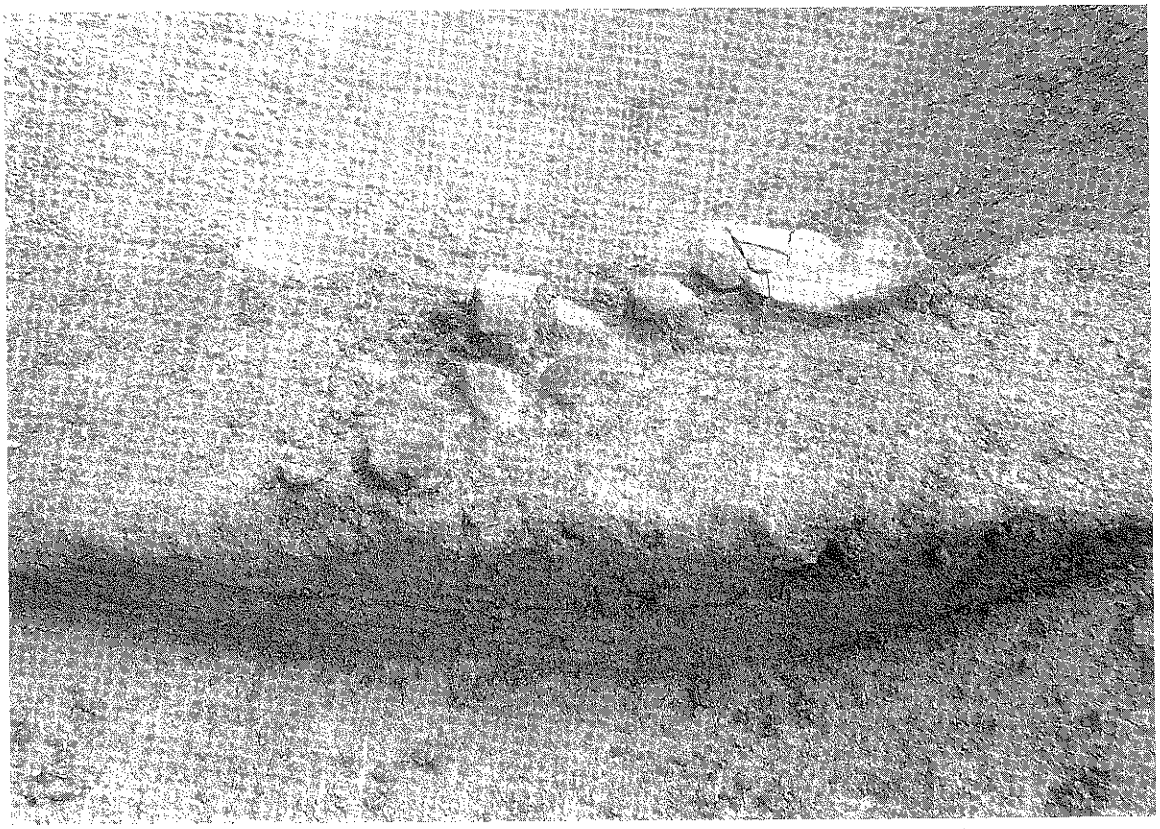
（第12～15図）

方形周溝墓の周溝の一部を検出した。周溝はトレンチ中程で一旦とぎれ、そのとぎれた地点で溝は方位を違える。深さは一定ではなく最も深い所で検出面から約0.5mを測る。幅は概ね2.5 m～３mを測る。

埋土は、大きく２層に分かれる。下層が赤褐色砂質土、上層が淡褐色砂質土である。丁度、畔を残した部分のこの２層間に比較的まとまって土器が出土した。周溝内からは、このまとまって出土した土器以外は、ほとんど遺物はみられなかった。



第14図　ＳＸ02全景（西から）



第15図　土器の出土状況（北から）

V 出 土 遺 物

今回の調査で出土した遺物は、整理箱にして約１箱であり極めて量が少ない。出土した遺物はすべて土壙墓と方形周溝墓の周溝内からであり、土壙墓からは玉類・竪櫛・刀子・土師器片、方形周溝墓の周溝内からは弥生土器が出土した。

以下、それぞれの遺構ごとにその概要説明を行うこととする。

A．土壙墓ＳＸ01

出土した遺物は多量の玉類（勾玉・管玉・棗玉・臼玉）と竪櫛１枚、刀子１本、土師器片１点で、いずれも床面より出土した。盗掘を受けておらず、出土遺物はほぼ原位置をとどめているものと考えられる。出土位置は第５図に示したとおりである。

１．玉類（第16～21図）

玉類は、勾玉・管玉・棗玉・臼玉の４種類が出土した。

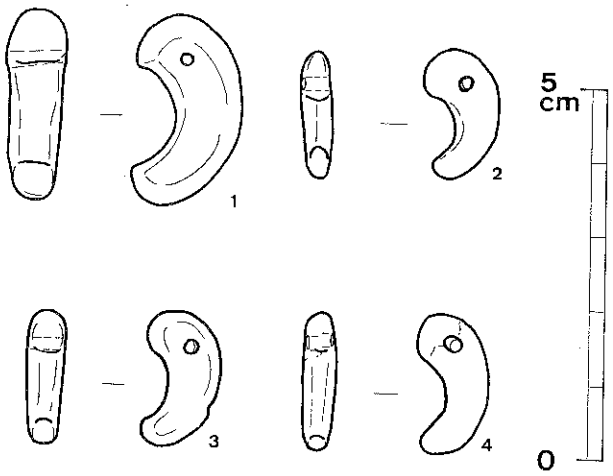
勾玉（第16・20・21図）

硬玉製１点（１）・ガラス質２点（２・３）・滑石製１点（４）の計４点が出土した。

硬玉製勾玉は全体的にやや厚でで、頭部・尾の先端部は尖る。全長25.3㎜、頭部の厚さは８㎜を測り、色調は半透明の緑色を主として斑状に白色部分を呈する。

ガラス質の勾玉は風化が著しいため白色化し、極めて遺存状況が良くない。形態的には全体的に丸みをもたない偏平な勾玉である。２は全長18㎜、厚さ約4.3㎜、３は全長18.7㎜、厚さ約3.4㎜を測る。

滑石製勾玉は全長17.3㎜、厚さ約4.3㎜を測る。全体的にやや偏平で、頭部の先端部は尖りぎみである。

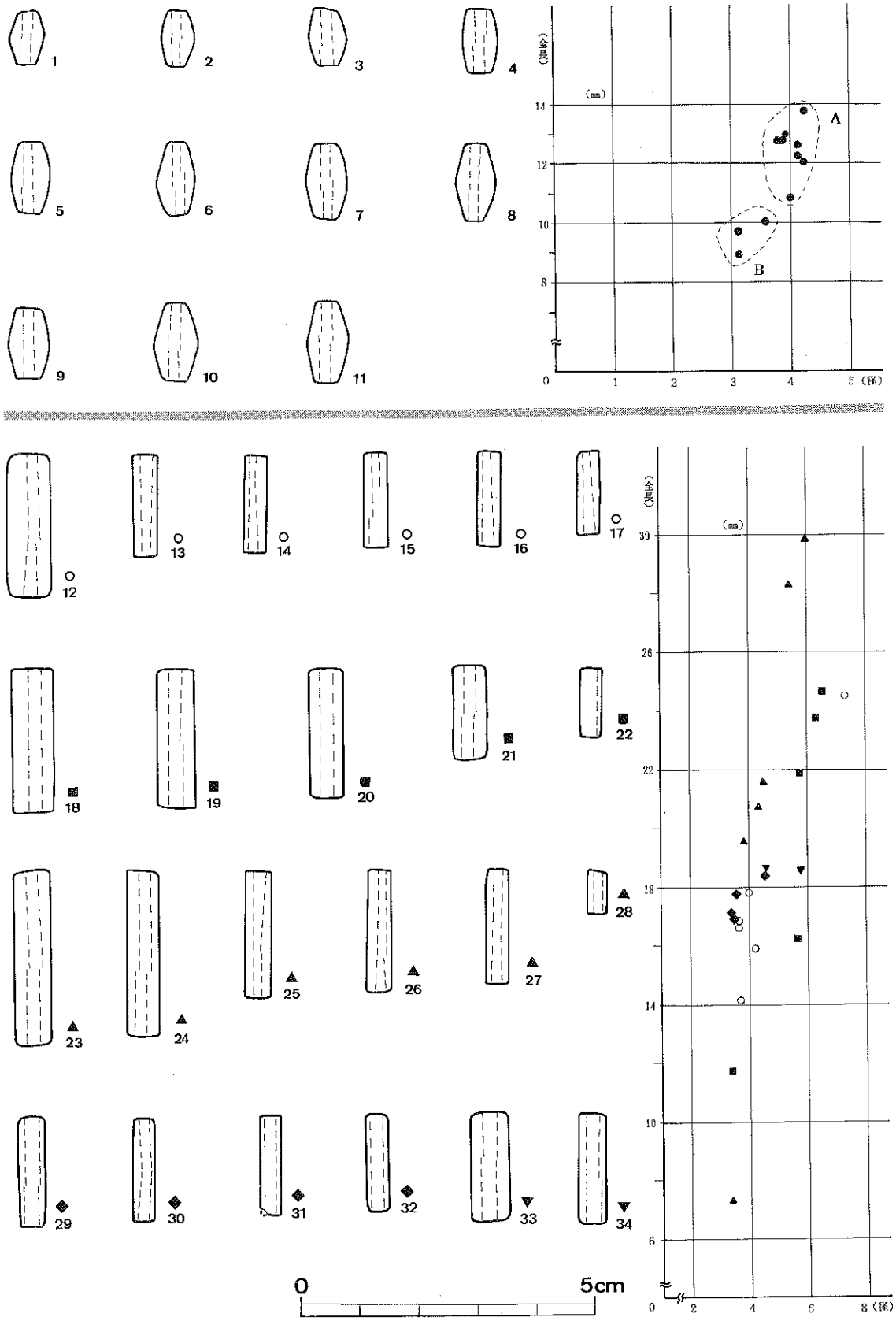


第16図　勾玉実測図

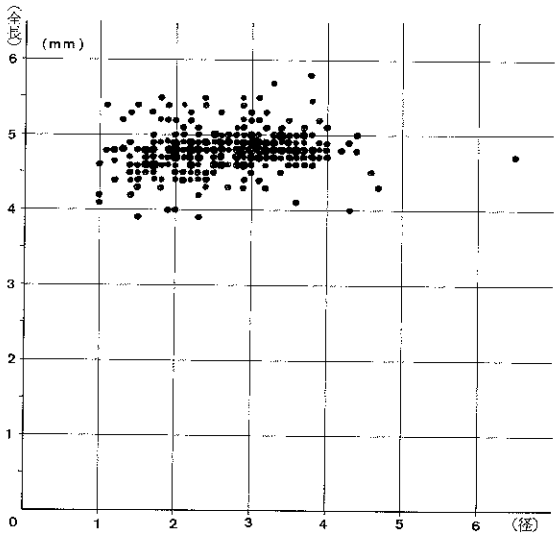
穿孔方式はすべて片面穿孔である。

棗玉（第17図１～11、第20図）

棗玉は計11点が出土した。良質な棗玉で、法量的には大小２種類（Ａ・Ｂ）に概ね分類できる。Ａは全長約13㎜、筒部の最も張った部位で直径約6.5㎜、最も直径の狭くなる両端面の部位の直径は約４㎜を測る。Ｂは前述の順序で9.5㎜、5.7㎜、3.1㎜を測る。



第17図　棗玉・管玉実測図及び法量分布図



第18図　臼玉法量分布図

穿孔方式はいずれも両面穿孔である。

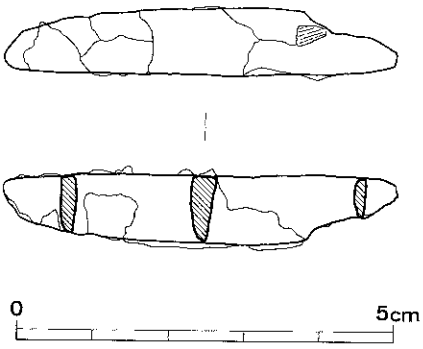
管玉（第17図12～34，第20・21図）

管玉は計23点が出土した。

色調によって５種類（○＝濃緑色、■＝緑色、▲＝淡緑色、◆＝灰白色、▼＝青灰色）に大別した。概ねではあるがそれぞれに直径には一定の規格性があるようである。全長に関してもある程度の規格性がみてとれるが、一部に外れるものも存在はする。

材質は、○・■・▲は碧玉製、▼が滑石製であろう。◆については不明である。

穿孔方式は両面・片面穿孔ともにみられる。



第19図　刀子実測図

臼玉（第18・21図）

臼玉は計420 点が出土した。作りは極めて丁寧な仕上げで調整痕はほとんどみられない。直径は１～４㎜とばらつきはみられるものの、全長に関しては4.5 ～５㎜に集中してばらつきがみられない。形も概ね統一され、臼状を呈している。滑石製。

２．竪櫛

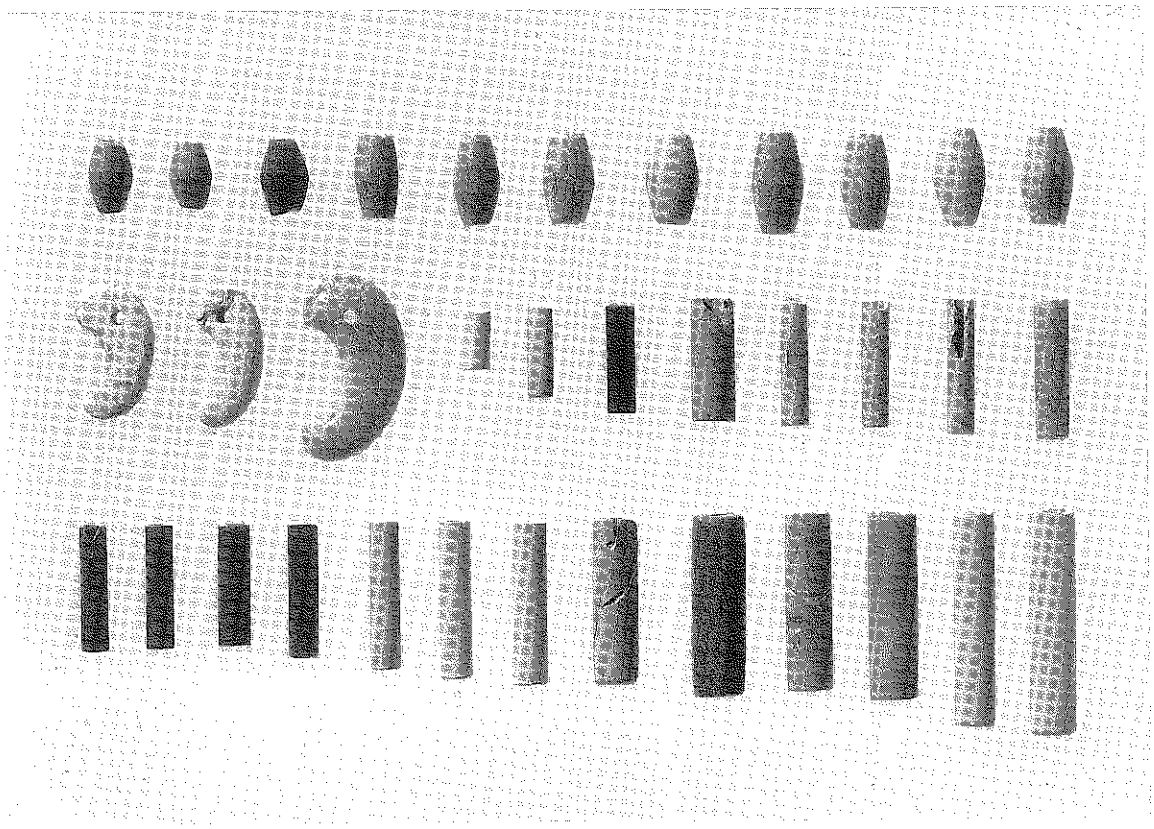
竹製の漆塗竪櫛が１枚、被葬者頭部の西側の壁面に接する形で出土した。頭部のみで歯部を欠いていた。漆膜のみの遺存で極めて脆弱であったため、完形での取り上げは不可能であった。頭部の巻き縛り箇所で幅約２㎝を測る。

３．刀子（第19図）

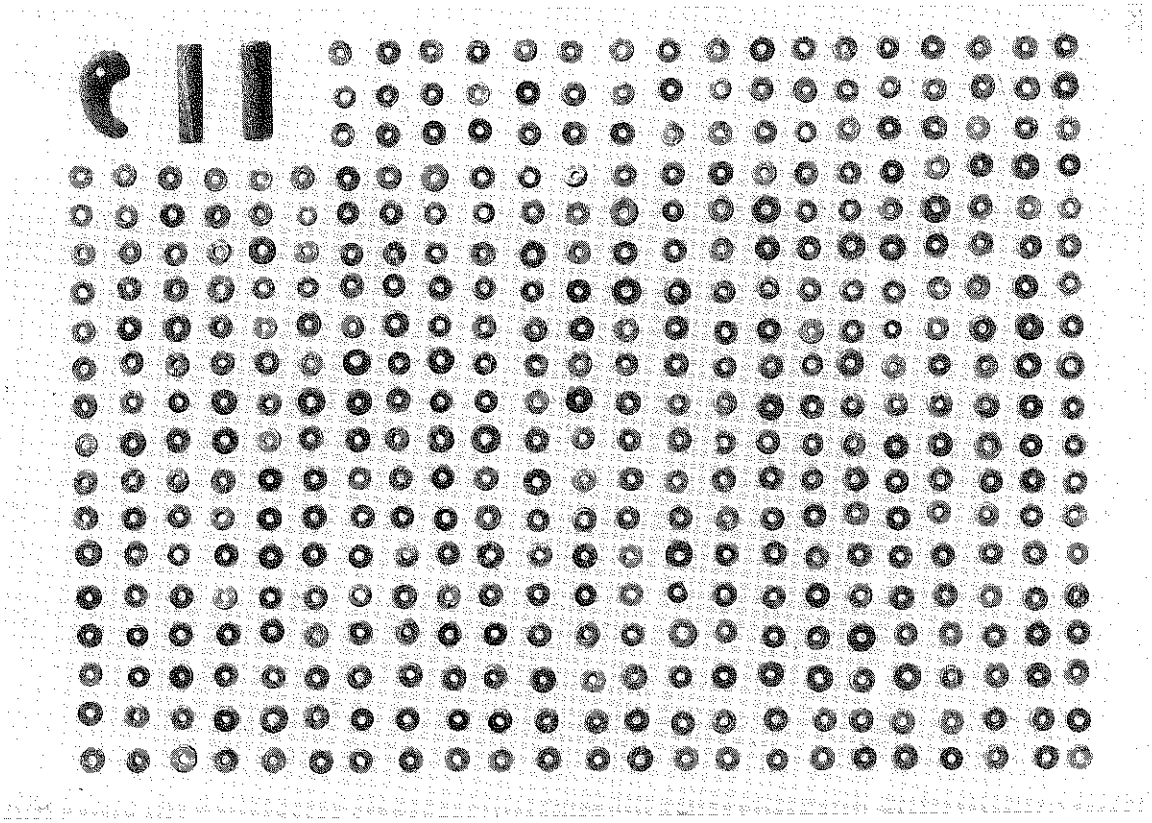
鉄製のミニチュアの刀子が１点、被葬者頭部よりやや北の東側壁面に接する形で、刃先を南に向けた状態で出土した。全長5.2㎝、刃幅1.2㎝、厚さ3.5㎝を測り、茎には刃部に平行して木質が若干遺存していた。

４．土器

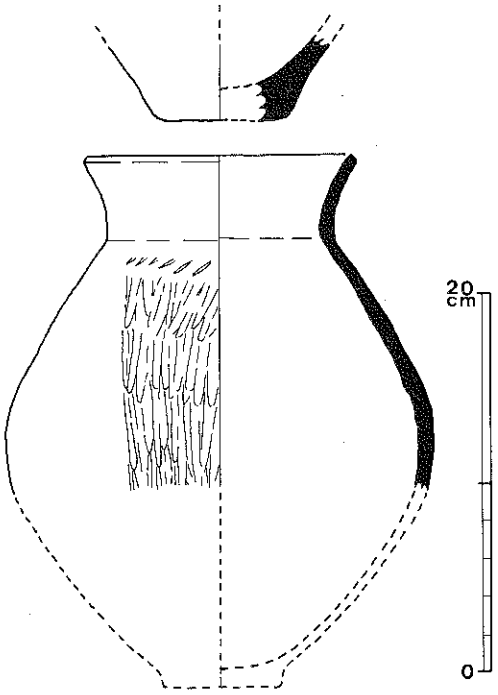
器壁の薄い土器片が被葬者頭部付近から１点出土したが、細片化のため器種は不明である。



第20図　勾玉（硬玉・ガラス質）・管玉・棗玉



第21図　滑石製玉類（勾玉・管玉・臼玉）



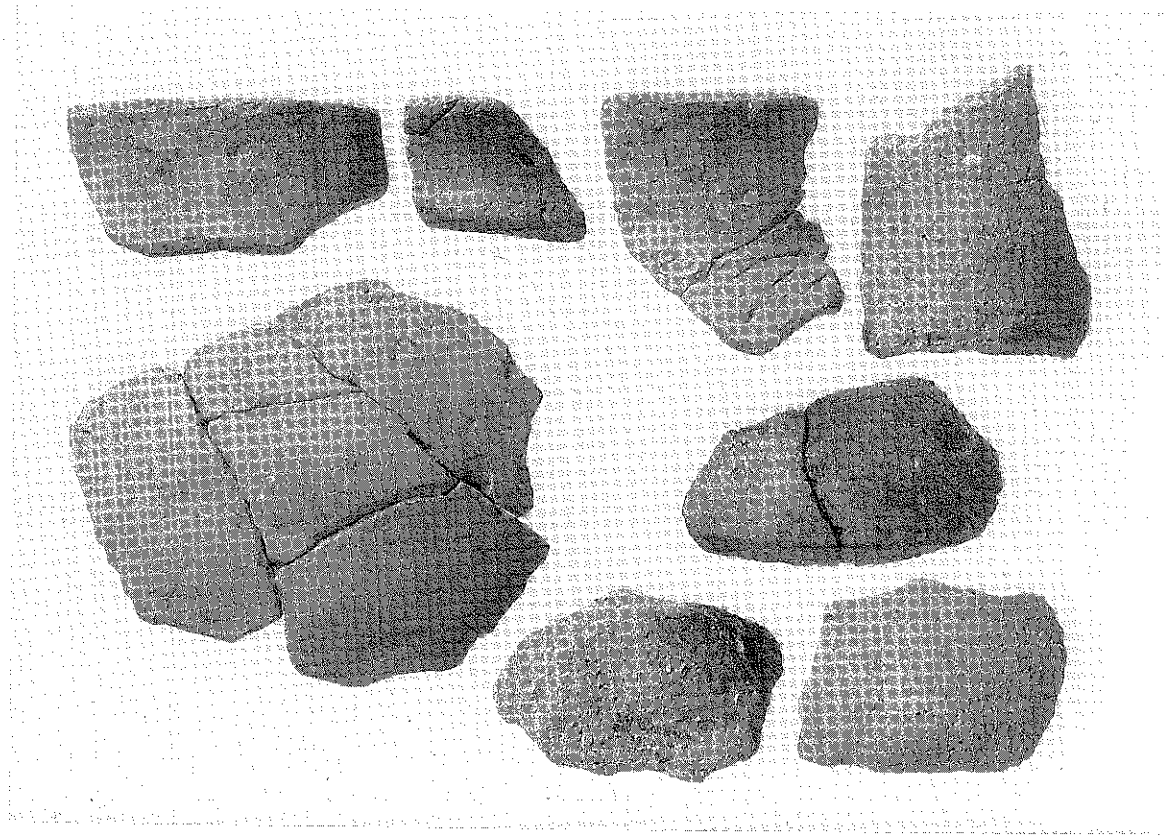
第22図　周溝内出土土器実測図

B．周溝内出土土器（第22・23図）

周溝埋土である淡褐色砂質土と赤褐色砂質土との層間で比較的まとまって出土した。

いずれも細片で、摩滅が著しい。底部の出土数や他の出土遺物等から4個体の土器の存在が確認でき、残りの良いもののみ図示した。

第22図1は平底の底部で他に出土した3点の底部もすべて平底である。第22図2は甕の口縁部で比較的残りが良い。緩やかに外反する口縁部を呈し、体部は中程で最も張るようである。外面にはミガキを施し、肩部に列点文を配する。弥生後期また他の出土遺物に長頸壺の頸部や器種の不明な土器もみられた。



第23図　周濠内出土土器

Ⅵ まとめ

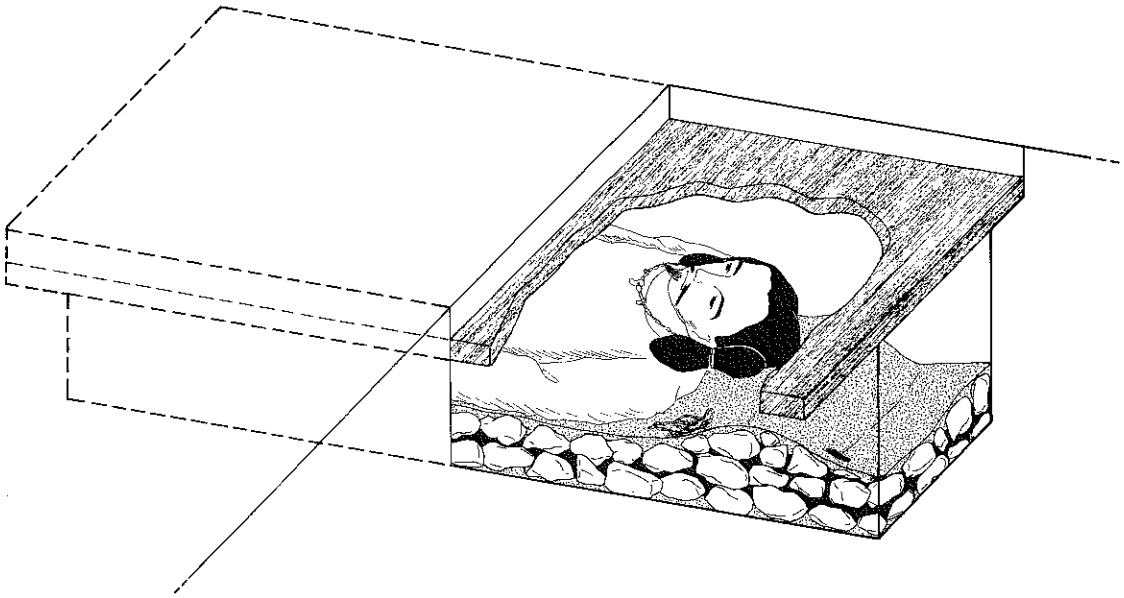
前章までに今回の発掘調査の経過、そして検出した遺構ならびに出土した遺物の内容について報告をした。ここでは、これらの成果の中の、特に土壙墓について若干の問題整理を行い本報告のまとめとしたい。

A．土壙墓ＳＸ01について

今回検出した土壙墓で特に注目されるのは、その墓壙の構造であろう。長辺1.8 m，短辺0.65mと墓壙の規模は決して大きいとはいえない。にもかかわらず、床面の下部構造が非常に精巧に造られていることである。このような床面構造を持ちながら、木棺を用いず木材による蓋のみにしている。通例の土壙墓と比べて、特色ある構造といわねばならない。

壙墓の構造については前章で詳しく述べたため、ここでは極く簡単に構築方法を述べておきたい。

この遺構の作り方は、まず地山を掘り下げ墓壙とし、底面にやや偏平な礫を初めに敷き詰める。その上に粘土を貼り、さらにその上に礫を敷き詰め、枕部はさらに粘土を貼って礫を敷き詰め、他の箇所より一段高くして枕部を作り出す。そして最後に厚さ３㎝程度に砂を全面に充填し、床面を形成する。使用された礫は直径が約25㎝～35㎝の範疇に収まり、その大きさには均一性がみられることから、使用された礫は選択されていることが窺える。使用礫は河原石である。最後に木板状の蓋を上段部にのせ、さらに土をかぶせその埋葬を修了した



第24図　土壙墓復元図

と考えられる。第24図はこの土壙墓の復元想定図である。今回検出した土壙墓の状況のおおまかなラインは、おそらくこのような復元図になるものと考えられる。ただし被葬者頭部の上、すなわち枕部と木口との間には若干の空間ができ、ここから刀子が出土している。この空間は副葬品の置き場所として利用されていたと考えられる。

被葬者についてであるが、床面に作られた枕の状況、玉の出土位置等から頭部の位置が理解でき、仮に被葬者の足が墓壙西端にくるとすれば、被葬者の身長は150㎝前後となる。古墳時代の成人の平均身長にほぼ等しい墓壙長といえる。実際に、この土壙墓に約150㎝の現代人が入ってみると、丁度想定どおりの状況になったが、墓壙幅が40㎝であることから、肩を狭めなければはいらなかった。この結果はあくまでも現代人においての場合であるが、被葬者と墓壙との関係を考える上で、参考になるデータではある。

年代については、出土した遺物が細かい年代決定とし難たいが、玉類が二子山古墳や久津川車塚古墳のものより古式の様相を示していることと、他の出土遺物が竪櫛・刀子であることから、概ね古墳時代前期後半から中期前半の中にあると想定したい。

この遺構については出土遺物が豊富なこと、墓壙の下部構造が非常に精巧に作られていること等から、一定の盛土を有した小古墳の主体部である想定もできないではない。ただし発掘調査では、この遺構周囲には周溝等の古墳に関連する遺構はみられないことから墳丘があったか否か、現状では判断しがたい。

B．ＳＸ01出土遺物について

今回出土した遺物は多量の玉類と竪櫛１枚、ミニチュア刀子１本であるが、ここでは竪櫛[8]と玉類について考えてみたい。

櫛は機能に化粧具としての解櫛（ときぐし）・梳櫛（すきぐし）と装身具としての挿櫛（さしぐし）とがあるが、出土品を機能別に分類するのは困難なことから、形態と制作技法から分類するのが一般的である。形態から櫛をみると、大きく竪櫛と横櫛とに分類される。竪櫛は縄文時代前期からみられ、横櫛については今まで飛鳥時代からの始まりが想定されていたが、大阪府の小坂合遺跡[9]、三重県の六大Ａ遺跡、滋賀県の斗西遺跡で古墳時代前中期のものが出土しているため、古墳時代ほぼ全般にわたって竪櫛・横櫛の両方が存在していたことが判明している。横櫛については現在のところ、４世紀と考えられる小坂合遺跡例が最古である。古墳時代以降、櫛は横櫛が主流となっていく。櫛の歴史からみれば古墳時代は一つの変革期にあたるといえよう。竪櫛については人物埴輪や宮崎県上の原９号墳のように人骨頭部に装着した例がみられることから、挿櫛としての機能はあったといえるが、解櫛・梳櫛としての機能についてはさだかにはできない。横櫛についてははっきりその性格をのべることはできないが、その後の横櫛の状況からみて挿櫛というよりも解櫛・梳櫛として使用されたと考えられ、古墳時代の中で櫛の機能分

化が始まったと考えることもできるであろう。

今回出土した竪櫛は古墳時代によくみられる竹製漆塗り竪櫛である。この竪櫛は「結歯式」と呼ばれるもので、細かい竹ひごを束ねて「U」字状に折り曲げ、折り曲げ部のやや下で紐状の繊維で結い、漆を塗って仕上げたものである。この竪櫛は大半は古墳から出土するが、流路や土壙等からの出土も報告されている。畿内の古墳から出土したものに限ってみれば、すべて竪櫛であり横櫛はみられない。横櫛については古墳から出土しないことから、その遺存率は低くなることとなる。この竪櫛は出土した時点では大半が漆膜の遺存でしかないため、墓以外での検出は極めて困難といえる。特に歯部については漆は塗られていないため、残るのは極めて稀である。古墳から出土した場合でも、完全なままとりあげるのは難しい。

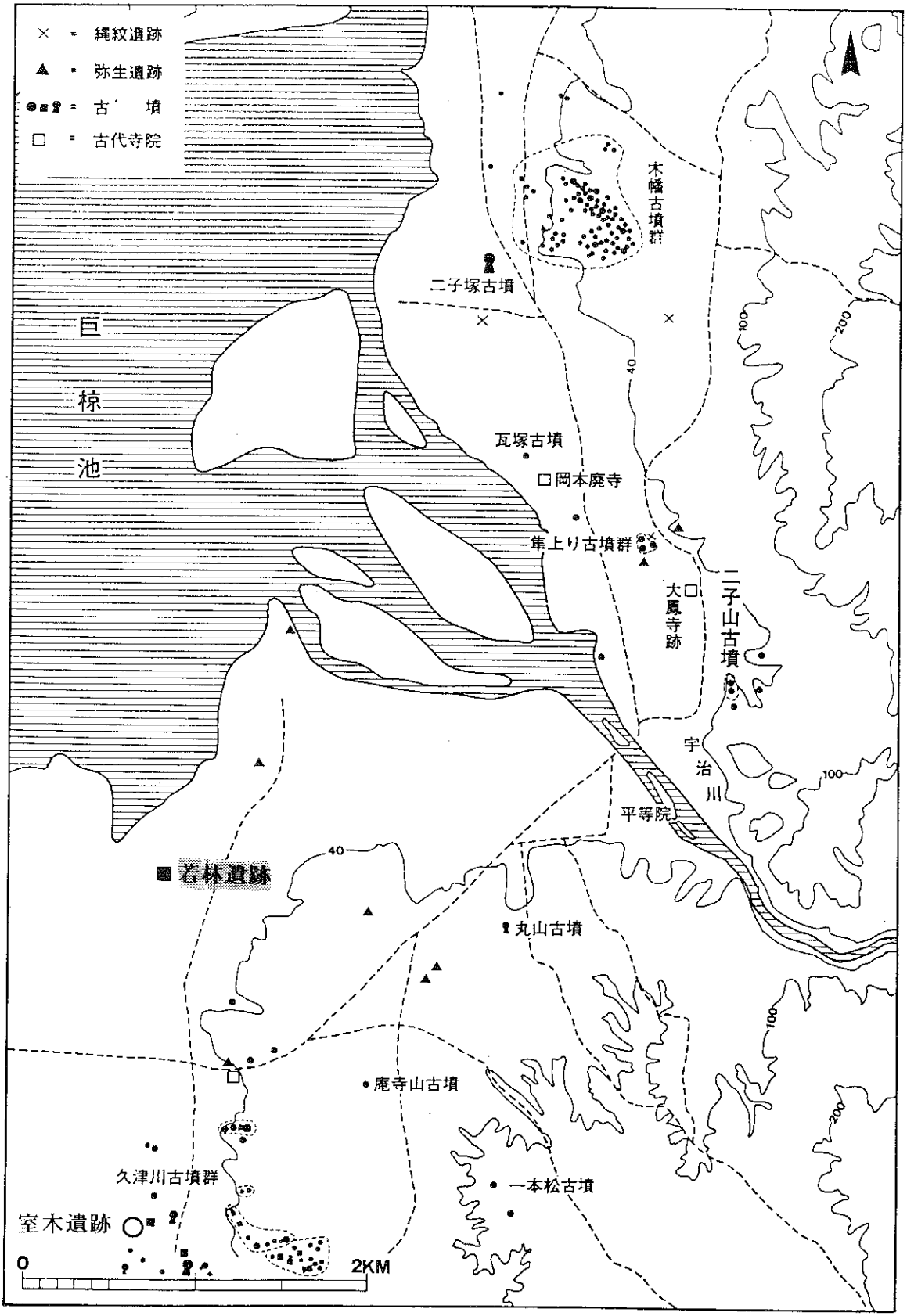
墓（特に資料の豊富な古墳）から出土した竪櫛についてみていくと、古墳から出土する竪櫛は、多数出土する場合と１点ないしは数枚で出土する場合に大きく二分できる。前者は最も多く副葬された例として堺大塚山古墳の約200 がある。出土状況については、故意にばらまいた状況やまとめて副葬された状況、また棺内・棺外と非常にさまざまな出土状況が報告されている。ここでは竪櫛を出土した遺跡を網羅的に扱えないが、注目すべきは、被葬者は竪櫛を大半の場合装着してはいないということである。被葬者が埋葬される時、櫛は被葬者に着装されているのではなく、何らかの祭祀行為の一翼を担って副葬されたと考えられるのである。

ここで問題としたいのは、若干ではあるが１点ないし２・３枚竪櫛が出土する際に被葬者頭部付近にみられることがあるという事実である。今回出土した竪櫛は、この場合にあたる。このようなとき、はたして櫛は髪につけられていたか否か、この点の判断が極めて重要となる。確実な着装例としては前述の宮崎県の上の原９号墳のものがある。

被葬者が櫛を着装しているならば埋葬時には櫛の祭祀行為が行われたといえず、あくまでも櫛は装飾品として使用されており、当然髪は結われていたと考えるべきである。

今回の出土の竪櫛については、人体に着装されていたかどうか確定できない。したがって先の復元図には描かないこととした。櫛の装着問題は、遺物として残り難く、人体においては遺存する率はほとんどないため、今後ともその解明は難しいが、埋葬時における被葬者の髪の在り方、また櫛の祭祀行為の中での位置付け等の葬送の問題を正確に復元していく上でも重要な視点と考えられる。

次に玉類についてであるが、今回の出土状況はほぼ原位置を保っていたために、玉それぞれの連なりを認識できる格好の資料となった。この土壙墓に被葬者が埋葬される際、滑石の玉類で構成された玉類Ｂは、被葬者の首飾りではなく、副葬品として取り扱われ、硬玉・碧玉等の玉類で構成される玉類Ａは被葬者がつけた首飾りである。２連は明らかに意識的に分



第25図　若林遺跡と古代の主要遺跡

けられており、玉の材質・種類によって玉の扱われ方が厳密に分別されていたことを窺わせる興味ある資料といえるであろう。なお玉類Bについては勾玉が1個であったことから、1連と考え長さが114cmとなったが、これを2重にして首にまきつけると玉類Aと同様に調度胸のあたりに勾玉がくることを最後に注記しておきたい。

C．若林遺跡について

若林遺跡がある伊勢田は、調査前まで古墳の空白地帯と考えられてきたわけであるが、第1次調査において、削平された古墳を確認することができ、また調査地南約1kmの旦椋遺跡の発掘調査においても6世紀代の古墳を2基確認[10]したことから、この地域の丘陵上にはかって古墳が多く存在していたことが理解されるようになり、今回の調査はその様子をさらにくわしく確認したといえるものであろう。

さらに今回の発掘調査で弥生期の方形周溝墓がみつかったことから、この辺りの丘陵上には比較的早くから墓域が形成され、古墳時代に至っても、墓地として利用されていたことが理解された。このような現状をみると、今だ未発見の古墳もまだ存在する可能性は高いことであろう。墓がある以上、当然その付近に人々の集落が存在していたことは想像に難くなく、これまでの発掘調査成果を踏まえれば、丘陵の裾部から西の平野部にかけての一帯が集落として考えられる。北にはすぐに巨椋池が広がり、また『延喜式』に記載される式内社伊勢田の社がここには存在していることからもこの地域に集落が展開している可能性は極めて高いものといえる。

最後に調査地の南約1.5kmにある久津川古墳群との関係に触れておきたい。久津川古墳群は車塚古墳（180m）や芭蕉塚古墳（120m）に代表される大型前方後円墳が集中して造られた南山城屈指の大型古墳群である。今回検出した土壙墓も、大きくはこの久津川古墳群の支配秩序の中に存在するものであることはこの地理的・歴史的環境から明らかであるが、特に注目したいのは、古墳との関係ではなく、この古墳群内に造られた集落室木遺跡[11]との関係である。

室木遺跡は芭蕉塚古墳の西に展開する遺跡で、遺跡の立地からも久津川古墳群との関連が十分予測される遺跡である。室木遺跡では、土壙内から若干の土器とともに滑石製臼玉、臼玉未製品、臼玉破砕品、滑石の原石、滑石の削り屑が出土しており、ここでは滑石製玉類の製作が行われたことが明らかとなっている。室木遺跡出土の滑石製玉類を実見[12]したところ、若林遺跡で出土した臼玉とは石材の色調が異なっており、若林遺跡で出土した臼玉の製作場は室木遺跡ではないと判断された。しかし滑石製玉類の製作に関しては、大型工房における場合ではなく、集落内小工房での生産も念頭に置かなければならないことを室木遺跡例は示しており、若林遺跡周辺における玉生産に関しては注意をしていきたいと思う。

最後に今回の発掘調査ならびに整理にあたってご協力いただいた方々にお礼を申し上げ、本報告のおわりとしたい。

（注）

1、「神楽田遺跡発掘調査概報」『宇治市埋蔵文化財発掘調査概報』第1集

宇治市教育委員会　　1982

1977年に宇治市教育委員会が実施した発掘調査で、柱穴・土壙・溝・井戸を検出し、土壙内より弥生後期に比定できる弥生土器が出土した。

2、「巨椋神社東方遺跡発掘調査概報」『宇治市埋蔵文化財発掘調査概報』第1集

宇治市教育委員会　　1982

1980年に宇治市教育委員会が実施した発掘調査で、遺構は確認できなかったものの弥生土器と中世土器が出土した。弥生土器はその諸特徴から弥生中期後半に比定される。また、扁平片刃石斧・石鏃が表採されている。

3、『伊勢田塚陶棺発掘調査報告書』　伊勢田塚調査会　1973

4、『宇治市埋蔵文化財発掘調査概報』　第17集　宇治市教育委員会　　1991

5、「若林遺跡発掘調査概要」『宇治市埋蔵文化財発掘調査概報』第18集　宇治市教育委員会　1992

6、「若林遺跡第2次」『京都府遺跡調査概報』第57集　財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター　1994

7、「若林遺跡発掘調査現地説明会資料」財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター　1994

8、竪櫛については以下の資料を参考とした。

亀田博「竪櫛」『末永先生米寿記念獻呈論集』　1985

「北原古墳」『大宇陀町文化財調査報告書』　第1集　1986

『木器集成図録』　近畿原始編　奈良国立文化財研究所　　1993

9、三重県埋蔵文化財センター穂積裕昌氏のご教示による。

10、「旦椋遺跡発掘調査概報2次」『宇治市埋蔵文化財発掘調査概報』　第20集

宇治市教育委員会　　1993

11、『城陽市埋蔵文化財発掘調査報告書』　第25集　城陽市教育委員会　1994

12, 城陽市教育委員会の小泉裕司氏の御厚意により実見の機会を得た。記して感謝します。

報告書抄録

ふりがな	うじしまいぞうぶんかざいはっくつちょうさがいほう　だい31しゅう
書名	若林遺跡発掘調査概報
副書名	宇治市埋蔵文化財発掘調査概報　第31集
巻次	
シリーズ名	宇治市埋蔵文化財発掘調査概報
シリーズ番号	第31集
編集者名	浜中邦弘
編集機関	宇治市教育委員会
所在地	〒611　京都府宇治市宇治琵琶33
発行年月日	平成7年3月31日

ふりがな 所収遺跡	所在地	市町村コード	遺跡番号	北緯	東経	調査面積	調査期間	調査原因
わかばやしいせき 若林遺跡	宇治市伊勢田町 大谷38－1他	26204	85	123° 90’ 75”	19° 91’ 75”	950801 ～ 950906	350㎡	住宅建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺跡	主な遺物	特記事項
若林遺跡	墓	弥生～古墳	方形周溝墓 土壙墓	弥生土器、玉、 竪櫛、刀子　他	

（宇治市埋蔵文化財発掘調査概報第31集）

若林遺跡発掘調査概報

発行日　平成7年3月31日

発行者　宇治市教育委員会
宇治市宇治琵琶33番地

製作　有限会社 新進堂印刷所